

浄瑠璃絵尽の効用

中村, 幸彦

<https://doi.org/10.15017/12299>

出版情報 : 語文研究. 15, pp.1-13, 1962-12-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



浄瑠璃絵尽の効用

中 村 幸 彦

一

操浄瑠璃の絵尽については、早く近石泰秋氏が国語国文学研究第四輯（昭和十六年七月）に「操浄瑠璃絵づくし本攷」において、始めて詳かな検討を発表され、同誌の第五輯（昭和十六年十月）には、更に近石氏の補遺及び祐田善雄氏の「絵づくし本攷縮説勘考」の二論文ものつた。近石氏のものには筆を加へられて、単行の操浄瑠璃の研究に収まつてゐる。その新著所収のものには、旧稿を増補された絵づくしの現存目録があつて、「たとへ一冊なりとも増加し得るならば、斯学のため誠によろこばしい事である」と附言がある。

九州大学国文学研究室では、去秋はからずも六冊約六十部の浄瑠璃絵尽を購求した。近石氏の目録と比較するに、それにもれたもの三十部を数へる。よつてその目録を先づかかげておくことにする。書名の上に○印のあるのは、近石氏の目録に見えぬもの。書名の下の出演年次と座の名は義太夫年表によつた。柱や丁数を示したのは、欠本など多いことゆゑ、広く各地の所在本と照合する時の便を思つて、祐田氏の助言によつたものである。ただし全部にわた

り普通に存する鼠色の厚い表紙を欠く。次に表紙としたは皆、袋表紙を意味する（一）中に書名を示したのは、表紙なくて原本に欠くものである。

第一冊

花山院都巽（享保元・七・一六。豊竹座）

柱「花」

表紙・序（三）——一三ヲハリ表。

呉越軍談（比翼台）（享保六・九・一一。豊竹座） 「こゑつ」

表紙・ろ・に・へ・ち・ぬ・を・か・た・そ・ね・ら表。

○東山殿室町合戦絵尽（享保七・一一・一一。豊竹座） 「東山」

表紙・四——十四終表。

（玄宗皇帝蓬萊鶴）（享保八・一・二〇。豊竹座） 「羅」

三裏——十四ヲハリ表。

○記録曾我玉笄番（享保八・五・六カ。豊竹座） 「曾我」

表紙（以下裁断により丁数不明なれど表紙とも十三丁半）

注 この初演は正徳五・六・二なれど、恐らくは再演の折のものか。もし初演のものとするれば、正徳にさかのぼる珍しい例となる。

太平記襖繪

「よろひ」

表紙・四十一表。

注 繪入狂言本風に各頁上部五分の二程に梗概を述べて下部は各

頁共繪がある。しかし人物に狂言本の如き役者の紋つかず。表紙は「絵尽」がもとの文字で、「襖繪」「太平記」と二度入木で改めてある。淨瑠璃は享保八年二月初演、歌舞伎では、大塔宮儀鎧と題して、享保八年七月以後、度々上演。体裁から見て狂言本と思はれるが、何年のものか未詳。この一冊中に綴つたので、合せてこの目録にのせる。

○関八州繫馬(享保九・一・一五、竹本座)

表紙のみ。

(身替弓張月)(享保一〇・五・六。豊竹座)

三裏・五十一表。

○北条時頼記絵尽(享保一一、四、八。豊竹座)

表紙・四十九表

「北」

第二冊

○(三莊太夫五人嬬)(享保一二・八・一。竹本座)「さんしやう」

十一・十二・十三表。

○三浦大助紅梅約絵尽(享保一五・二・一五。竹本座)「みうら」

表紙・三裏―十二終。

○須磨都源平躰躪(享保一五・一・一五。竹本座)「つゝし」

三裏―十二表。

○(車選合戦桜)(享保一八・四・八。竹本座)

「車返」

序(山本氏)(三)―十一表。

○曾我昔見台絵尽(享保一九・六・一。豊竹座)

表紙・三裏―十一表。

那須典(与)市西海硯をづくし

(享保一九・八・一三。豊竹座)「那須」

表紙・三裏―十一表。大坂堀尾新九郎守保筆。

○赤松門心緑陣幕をづくし(元文元・二・一。竹本座)

表紙・三裏―十一表。

「赤松」

和田合戦女舞鶴をづくし(元文元・三・四。豊竹座)

表紙・三裏・五十九表。

「和田」

(敵討襦袢錦)(元文元・六・一。二。竹本座)

三裏―十了表。

「錦」

第三冊

○奥劔秀衡有鬘塔(元文四・二・一。豊竹座)

表紙・三裏・四十一表。堀尾守保筆。

「ひてひら」

○(狹夜衣鶴鷲劍翅)(元文四・八・一五。豊竹座)

裏(丁付は見えず、以下裏とのみしたは同じ)・四十一表。

大坂堀尾新九郎守保筆。

おさん恋八卦柱曆をづくし(元文五・一・一。竹本座)「恋」

茂兵衛窓八掛柱曆をづくし(元文五・一・一。竹本座)「恋」

表紙・裏・四十表。

都瀬梅若 本朝斑女簀絵尽(寛保元・三・四。豊竹座)「はん女」

躪育松若

表紙・裏・四十一表。大坂堀尾新九郎守保筆。

播州皿屋舖(寛保元・七・一五。豊竹座)

表紙・三裏十表

「さら」

○児源氏道中軍記絵尽(延享元・三・六。竹本座)

表紙・三裏一八。

「児」

○木曾路掛橋 柿本紀僧正旭車(延享元・九・一〇。豊竹座)
吾妻路石枕

表紙・三裏・四一九表

「かきの本」

注、表紙は第一冊目東山殿室町合戦絵尽の表紙裏に綴合す

伊勢平太清盛 詩近江八景八段続(延享二・二・一。豊竹座)
陸奥太郎義朝

表紙・三裏十表。

「詩」

○酒吞童子出生記絵尽(延享三・五・六。豊竹座)

表紙・三裏一十了表。

「とうし」

第四冊

遠州夜啼石 悪源太平洋合戦えづくし(延享四・七・一六。
山州奴茶屋 豊竹座) 「平」

表紙・九了裏・三十九了表。

注、九了裏即ち冒頭に重ねて表紙同様の題を示したのは、この
六冊の一群では、これを始めとし以下に続く。

○傾城枕軍談えづくし八端物(延享四・八・二三。竹本座)「ケイ」
表紙・九了裏・三十九了表。

注、角書に「都変名嶋勘左エ門
故郷呼名七草四郎」とあり。

○大物船矢倉 義経千本棧えづくし(延享四・一一・一六。竹本座)
吉野花矢倉

表紙・裏・三十一六。

「義」

○撰州渡辺橋供養(寛延元・一一・一四。豊竹座)

表紙・九裏・三十七。

「橋」

○華和讚新羅源氏えづくし(寛延二・七・一五。豊竹座)

表紙・裏・三十九表。

「花」

注、表紙に「大切浪花五節句操おどり」とあり。

○八重霞浪花浜荻上中下(寛延二・三・一六。豊竹座)

表紙・裏・三十九表。

「重」

関取濡髪 双蝶曲輪日記続九場(寛延二・七・二四。竹本座)
名取放駒

裏・三十八表。

「双」

振袖のお乳人 恋女房染分手綱えづくし(宝暦元・二・一。竹本座)
留袖の招婦

「恋」

表紙・九了裏・三十一六。

愛護稚名歌勝関絵つくし(宝暦三・五・五。竹本座)

「愛」

表紙・裏・三十八表。

注、表紙は二冊目の曾我昔見台の裏に綴合す。

時代 世話 うすゆき物語(宝暦四・七・一六。竹本座)

「新」

表紙・裏・三十八表。

五冊目

七条 釜淵双紋巴(宝曆四・七・二九。豊竹座) 「釜」

裏・三十八表。

注、元文二・七・三。豊竹座初演なれど、内題はじめにあれば二度目以後として、二度目のこの年次に配した。

○庭涼操座鋪(宝曆五・七・一六。竹本座) 「二八」

二・五・六。

○平惟茂凱陣紅葉(宝曆六・一〇・一五。竹本座) 「平惟茂」

表紙・八裏・三十八表。

常盤御前 姫小松子日の遊(室曆七・二・一〇。竹本座) 「子日の遊」

熊野御前 八裏・三十八表。

○古追善 崇禎寺馬場敵討十二冊(宝曆八・三・一三。竹本座) 「崇禎寺馬場」

今沙汰 表紙・八裏・三十七。

菅原伝授手習鑑(宝曆八・五・一五。竹本座) 「手」

裏・三十八表。

注、初演は延享三・八・二一であるが、刷悪く、又内題あればこの二度目以後のものとして、ここに配す。

○時代 難波丸金雞えづくし(宝曆九・五・一四。豊竹座) 「金にわとり」

世話 表紙・八裏・三十八表。

由良港千軒長者(宝曆一一・五・一六。竹本座) 「ゆらのみなと」

八裏・三十八表。

○おはつ 曾根崎模様拾冊物(宝曆一一・五・一八。豊竹座) 「そねさきもやう」

徳兵衛 八裏・三十八表。

源頼朝 古戦場鐘懸の松(宝曆一一・一一・二〇。竹本座) 「古戦場」

源義経 表紙・八裏・三十八表。

○清水清春 花系図都鑑(室曆一二・三・二一。竹本座) 「はなけいつ」

清水清玄 表紙・八裏・三十八表。

○主馬判官盛久 傾城阿古屋の松絵尽(明和元・一・一七。竹本座) 「あこや松」

佐々木三郎盛綱 表紙・八裏・三十八表。

官軍一統志(明和元・四・一〇。豊竹座) 「官軍一統志」

八裏・三・五・七・八表。

第六冊

しきしま操軍記(明和二・三・一六。豊竹座) 「みさほぐんき」

表紙・八裏・三十八表。

泉州小田居茶屋 三日太平記えづくし十段統(明和四・一二・一四。竹本座) 「三日太平記」

撰州殿下茶屋 表紙・裏・三十八表。

正保 糴水絹川堤(明和五・二・一五。幾竹嶋吉座) 「絹川堤」

表紙・六裏・三十一表。明和五年九月吉日 八文字屋八左衛門
ひし屋治兵衛、きく屋七郎兵衛、罫屋喜右エ門合板。

○傾城阿波の鳴門五切物(明和五・六・一。竹本座)「あわのなると」
表紙・八裏・三十八表。

注、表紙に座本近松門左衛門とあり。

○初樽掬目録(明和五・九・一四。竹本座) 「初やくら」
表紙・七裏・四十七表。明和五年九月吉日。

○近江 太平頭鑿飾(明和七・五・二二。竹本座) 「かふとのかさり」
源氏

七裏・三十七表。

注、内題下に「太夫竹本義太夫、座本竹田新松」とあり。

融大臣塩竈桜花(安永六・八・一五。北堀江座) 「とをる」
裏・三十七表。

注、内題下に「座本豊竹此吉、太夫豊竹若太夫、名代豊竹此太
夫」とあり。

夫」とあり。

佐々木高綱武勇日記(安永七・四。京都竹本座) 「さ、木高つな」
表紙・裏・三十七表。

道中亀山嘶(安永七・七・一七。)

表紙・同裏・三十八。 「かめ山はなし」

注、表紙に「座本竹田万治郎太夫竹本染太夫」とあり。表紙の
裏は太夫の番付。末に「京都つる喜・きく七・ひし治・山九板」

「人形頭取吉田源八・桐竹門蔵」「正本所大坂今橋筋西横堀寺

田吉九郎板」などある。

○あづま撥恋山崎

「恋山崎」

七裏・三・五・六・七表。

注、年次未詳。

二

目録を掲げれば、本稿の目的の大半は終わったやうなものである
が、繙読の間に、想到された二三の問題を附け加へておかう。これ
ら絵尺が浄瑠璃研究に如何に資するかの見通しは、近石氏も「価
値」の条を設けて述べられたし、祐田氏もその利用における諸注意
を詳述される。以下効用と題して提出するのも、研究資料として、
如何なる利用価値を示すか。具体的な例示なのである。

1 丸本のない作品は、絵づくしによって、筋の大略を知り得
ること。

かうした効用でとり上げるのは、新出の「近江 源氏太平頭鑿飾」であ
る。この曲については、「撰陽奇観」三十三、明和七年の条に、

一 五月 竹田新松座あやつり

近江 太平頭鑿飾五月廿二日初日

源氏

六月十六日差留メ被仰付候、夫故正本不出、後年鎌倉三代記と
いふ古浄瑠璃の外題を用ひ今に飜ふ、都而此世界は差構有之、
南蛮鉄後藤目貫を義経腰越状とする類ひ多し

とある。後年の鎌倉三代記と同くして、「都而此世界は差構有
之」と云へば、写本としても明和八年の禁書目録の中に加はる難波

戦記に素材を求めた故の差留めであった。その為に「正本不出」であつて、ただ義太夫年表が収める番附の人物役者付によつて、「近江源氏先陣館」の改作などと考へられてきた（義太夫年表）。そして鶴見誠氏が日本古典文学大系の浄瑠璃集に鎌倉三代記を収められた時、「撰陽奇観」の記事を引用、始めて鎌倉三代記との關係が明らかにされた。大系の鎌倉三代記の底本には異本の花飾三代記を用ひられたのであるが（花飾三代記と鎌倉三代記の前後も同大系月報三八の鶴見氏の訂正補説によつて、簡単に定めがたいこととなつた）、その解説には、

私は花飾三代記を、節付は削られているが、太平頭整飾の正本そのものと考え、その出版は明和七年初演の頃であると推定したのである。

と述べられた。花飾三代記、または鎌倉三代記と、太平頭整飾との關係についての、叙上の如き推定が、はたして正しいか如何かは、正本の出現の期待出来ない今日、最も有力な資料は、この新出の絵尽であらう。その筋の大体を知る意味もあつて、この絵尽の説明文の全部を翻字、大系所収の花飾三代記本文と内容の該当し、又は相違する所を比較して見よう。全文を出すまでもないが、次の問題の資料にしたがふもあつてである。

近江 太平頭整飾 九段職
源氏

○ふるかうり新左エ門、よりいへのわはく

○へんじをもちかへる。

三うらの介、よりいへよりわはくのし

花飾三代記九段

第一に同

しやにきたり、ときまさのいせいをみてう
らやむ。

ほうせうときまさ、わはくのへんじをした
ゝめ、げつはんをして三うらにわたし給ふ。
とひの弥五郎さかもとよりかへる。

○かまくらのししや松田のさこん、くらかり
にてあさちとはなしている所を、大ばにき
つけられて、せうこのため急ほしのかげを
きられなんぎ。

大ばげき、こいのいしにてふぎなりとよば
る。

こしもとあさちなんぎ。

うちのかた立いで、兩人のなんぎをすくひ
玉ふ。

さこんあさちをるころし、われもしせんと
して、さゝきにとめられ、わがしんていの
かきつけを見せて、みかたにくわへられよ
といふ。

佐々木たかつな、二人がかくごをとゞめ
て、しんていをきゝ、みかたにくわへ、れ
んばんをさす。（大でき）

あさちよろこぶ。

○わだ兵へ、いくさひやうきをもちいられざ
るゆへ、よりいへをみかぎり立のく。（大

あたり)

(坂本のしろ) 佐々木三郎左エ門が子小三郎、おやのかたきとつめかくる。

さゝ木四郎左エ門高つな、めうばんにてもはゝと一ッしよにきたれといふ。(大あたり)

小三郎大ぜいをきりちらす。

はゝはやせはたらく。

うんの、四郎にく。

○わだ兵へ、しろより下り、もとのかごかきすがたとなり、いまゝでつかひしやつこども、ひまをやりて、一ッしよニあつまりさけをのみたのしむ。

やつこどもよろこぶ。

女ぼうまきのと、むかしのまへだれすがたニなる。(此所おもしろきしゆかう)

○まり川六郎、ときまさよりわだをかゝへきたる。

和田兵へ、大あくかふし、そのうへほうせうのすみつきを引さく。(大でき〜)

よこすか小やだあきる。

○うぢのかた、よりいへのわかきみきんさとをいだきてきたり玉ひ、わだ兵へをたのみたまふ。

あいづののろしを上玉ふ。

わだ兵へあらためてきんさとぎみのけらい

第三

となり、ふぐをきて、わかをあつかり、よろひのうちいたき、大ぐんの中へかけこむ。(大あたり〜)

「かせいはたのまぬひけ〜。」

わかきみけいごのかせい、のろしにてはせきたる。

女ぼうまきのと、おつとのでたちをよろこひ、むまひききたる。

○わだ兵へ、きんさときみをくわいちう二いたき、たせいを相てニはたらく。(大でき)ぐん兵とも切たてらる。

まり川六郎ふみつけらる。よこすか小やだにぐる。

○(此所からさきはまべのけい、小人ぎやうのはたらきみ事〜) まきのと、おつとよりわかきみをあつかり、大ぜいとたゝかふ。(大あたり〜)

きんさとぎみとまふねニのせられたゝよひ玉ふ。

○まきのおもわずも、さまよいきなり、おやにめぐりあひ、わかを見てよろこび、ふかでにてさいご。

かたおか八郎太夫、むすめが物がたりにて、みうしないたるわかきみニあわす。

第四

第四

第五と相違

八郎太夫女ぼうなげく。

ふるこうり新左エ門やうすきゝいる。

○八郎太夫むすめよりあづかりしきんさんと
は、和田ふうふが子ときととり、くびうつて
わたし、そのみもはらきりいる。(此所大あ
たり〜)

ときまさの子ゑまの小四郎よしとき、わた
ふうふの子をがてんして、きんさんとがくび
にしてうけとりかへる。

○とんだ六郎、藤三郎をさゝきにたりとてか
らめきたる。

百せう藤三郎さゝ木二にたるゆへ、なわか
りきたり、ときまさのけらいニなる。

女ぼうおくるおつとのあとをしたひきた
る。

高つな女ぼうかゝりひ、いけとられてい
る。ときまさ藤三郎さゝ木にたるゆへ、
入ずみをさし、ときひめむかいをいゝつけ
る。

○ときひめ三うらの介かたへきたり、とうふ
ときげとをかふてもとる。(此所おもしろ
きしゅかう)

むかいのさむらい、かささしかける。

第五と相違

兩人ひめをむかいニきたりかしづく。
藤三郎、ときまさよりまもりかたなをもら
ひ、ひめをむかへニきたる。

○三うらの介、けふのいくきにうちじにとか
くごきわめ、いくさばよりは、ニいとまご
いのためたちかへり、ときひめニはかりこ
とをいゝふくめ、ふかでおひたるうへ
に、よろひをきて、又せんちやうへかけゆ
く。

第六に同

○藤三郎まことはさゝ木高つな、三うらとけ
いりやくをいゝあわせ、てきちんへいりこ
む。

よせてのとふみをする。

三うらの介はゝびやうき、三うらがせんち
やうより見まいにもどりをいかり、たい
めんせぬ。はゝよめがもちたるやりにてじ
がいます。(此段古今の大あたり〜)
ときひめおつと三うらとさゝ木とにいさめ
られ、おやときまさをうたんとうけあふ。

第七に同

(花飾三代記にはなく、鎌倉三代記には、
この間に道行がある)

○くわいてつおせう、松田さこんとあさちと
ニ、きんさとをあづけて、此所をおとしお
つてのものを、ほうだんでうかす。(おか

第八(鎌倉三代
記は道行を第八
として、ここは

しきどふもく)

おつてのものとも、ひやうしにのりてうかされかへる。

○藤三郎(本めうさく、木四郎左エ門)、三うらがくひをとりかへり、ひめを女ぼうにはしきといふ。くびてうつける。

○ときまさひめ二ことをのぞむ。ときひめ三うらの介かうちじにのやうすをき、ことひきながらうれい。

よしときやかたのさうどうをき、つけ玉ふ。

ときひめじがい。

○き、木高つなすがたをあらはし、ときまさニてつほうをうち、大ぜいをなやまし、よりいへの御あとしたい、りうきうへゆく。

新左エ門大ばげきをからめ(る)。

(せりだし、せりこみ、せりあげ、せりさげ、古今の大道具見事く)

以上の比較からは、第五と第八に相違をみるとめ、鎌倉三代記にあって、花飾三代記にない「道行竊の顔吉花」の有無が、かぶとの飾の方では、よくわからないと云ふ結果が出る。相違の箇處を以下に検討する。

花飾三代記によれば、第四の末で、和田兵衛の妻お巻は、夫

第九)と相違

第九(鎌倉三代記は第十)に同

第九(同)に同

第九(同)に同

から托された公曉君を琵琶湖中に流れ出る舟の中にのせて、見失つてしまふ。ここは国性爺合戦の梅檀皇女と離れる柳歌君の趣向をかりたものであらう。第五に入つて、若君をたづねてお巻がたどりついたのは盗賊摺針太郎左エ門の宅である。その摺針とはかりの名、実は京都方の忠臣小坂九郎(鎌倉三代記では鷲尾三郎)で、その妻およりはお巻の姉にあたる。そこで湖中の船で、摺針が助け、半櫃の中に入れて来た公曉を、かねてお巻夫婦からあづかつてゐた和田の一子三郎にかへて、北条方に渡す身替劇が展開する。その後には公曉を対馬の冠者義広にあづけて、その安泰をはかるのである。かぶとの飾では、和田の妻巻の戸は、同じ筋で実の親片岡八郎太夫の宅に来たり、そこで身替り劇を演ずるのは、八郎太夫と、その妻おより(義太夫年表所収番付による)とである。この相違を前後を見渡して検討するに、明らかに三代記が、かぶと飾の方をかへたものである。三代記の第三に「我とても和田兵衛の妻片岡が妹」とお巻に云はせたのは、この曲の前編とも云ふべき近江源氏先陣館との関係を示して、その登場人物片岡造酒頭のことを指すが、この語がその後の筋に何の影響をも及ぼしてない。かざりの飾でも、この語はやはりあつて、それはこの第五に片岡八郎太夫を出す為の伏線だったのである。この餘尽では、この第五に江馬の小四郎義時が出てくるが、三代記の方では全く見えない。しかるに三代記の第九に「二代の大將江馬の義時」が一ヶ處のみ見える。かざりの飾の方でも勿論そこで出ることには前にか、げた。三代記では、誠に無用な人物配置であるが、かざりの飾の如く第五に既に出てゐたとすれば、この人物は生きてくる。三代記は、花飾にせよ鎌倉にせよ、かざりの飾の前後はそのまゝにして、第五をかへたと見てよいのである。手許の鎌倉三代記の丸本(末に

ともかく「安永十年丑三月廿七日」とあり、巻頭にもその初演の淨瑠璃太夫役割を附したものに、第五は丁数「三十四」から「四十七」にわたつてゐて、初めも末も、前後の丁に文章が及んでゐない。こと、道行などの部分と同様である。この部分だけ改訂があつたと認めてもよい印刷面である。

三代記の第五で、摺針が、公曉を義広にあづけければ、その安泰は保証されたもの。よつて、見て来た如くかざりの飾では、第八のチヤリ場で、僧快哲が松田左近夫婦に公曉を保護させて逃がすのであるが、三代記ではその必要がなくなつて、たゞに夫婦のみが逃げることにしてしまつた。筋全体から見えてきて大事でない人物のこの夫婦の逃亡のみに一段を設けるとは、作品として余り意味がない。かぶとの飾の如くであつてこそ、第二の松田夫婦の伏線も生きるので、第五の改訂が、全く第八を悪くしてしまつた結果となつた。以上の二段から見ても、かざりの飾をそのまゝで花飾三代記が出たのではないことは自然と明らかなだが、摺針の宅の場のみならば、どちらとも云へないが、作全体としては、悪く改められたと云ふべきである。ただし絵巻が出板された後に、上演内容に変化があり、丸本と絵巻とが違つてくることも、全くないとは保証しがたい。がこの曲に関するかぎり、絵巻の如くに上演された可能性の強いことを示す一証がある。

義太夫年表の安永七年四月の条に「佐々木高綱武勇日記 京都竹本座(外)正本出でず」とあるものの絵巻は全く太平かぶとの飾の板下を用ひて同一である。相違は、「佐々木高綱武勇日記 九冊物 竹本義太夫」と改めた内題と、表紙のみである。この一曲は、大阪で禁止

をうけたことは、撰陽寄観の云ふ如くであるが、九年の年月をおいて、ここに又「新浄るり」(表紙)と銘うつて京都で上演したのである。同じ絵巻を出したのは、全く同内容の上演と見てよいのはなからうか。撰陽寄観に既にあり、義太夫年表編輯の博搜をもつてしても、正本なしとする所は、かぶとの飾の正本は出版されなかつたのであらう。が流布しなかつたが印刷物が、印刷物でなくても写本がこの間伝はらねば、かく再演出出来なかつたはずである。鶴見氏の指摘された花飾三代記第九に残る初演時の太夫名は、さうしたものにあつたのを、印刷に際して残したものである。佐々木高綱武勇日記の上演も亦、正本が出なかつたと年表が云ふが、それにかはるべきものが新しく作られなければ、上演が不可能であつたらう。同じとは云ひながら写し伝はる間に相違も出来たかも知れない。殊に玄人間の流伝であつただけに改作と云ふことも、安永十(天明元)年三月廿七日、今度は江戸肥前座で鎌倉三代記として、三度目上演される迄に、既におこなはれてゐたことも考へられる。勿論三代記の折の改作も考へられる。どの底本がどの様に用ひられて、読本浄瑠璃の花飾三代記や、鎌倉三代記が生れたか、三代記系丸本諸本の複雑な調査は、今の私の課題ではない。ただ、太平かぶとの飾と花飾三代記の相違を絵巻が物語ることを報告するのみである。

□ 演出状況を想像する手がかりとなること。

これは近石氏も絵巻の価値の一項目として、既にかかげた所で、この点は、たとへ当時の関係者見聞者の詳密な筆記の類が残つてゐたとしても、絵巻以上に有効なるものは、先づないであらう。とすれば、演劇としての操人形芝居を伝へるものとして、絵巻の持つ最

高の価値とみなすべきものである。たとへば菅原伝授手習鑑(延享三年)の今に伝はる三つ子の衣裳について、浄瑠璃譜に「梅王丸松王丸桜丸三子とも惣髪にて黄色大郡内縞八掛紅なければ大坂を始國々にても三ツ子と見ず、是吉田文三郎が仕初なり」など云ふも、絵巻を見れば一目瞭然である。又愛護雅名歌勝聞(宝曆三年)で、浄瑠璃譜に「舞台一面水の船にて道具はなほだ宜し」とあるのも、絵巻につけば、どの場面かが明かになる。にをてる姫が愛護の若をしたれば比叡山にのぼる所で、にをてる姫は桐竹助三郎が出づかひをし、「あめかぜはげしきてい 此所ひるい山のてい大かきり大でけ〜」と注してあるのが、本水を利用した第一の所である。が更に、さなへの介がみだけ惣五郎を打つ場面や竜骨車の水責の場面でも、「此所水中のはたらき大でき」などあつて、亦本水使用と見てよい。盛に利用したればこそ、譜の如き評となつたのである。演出状況と一口に云つても、以上の如く人形の衣裳や舞台装置など多方面に渡る。私は太平かぶとの飾に

此所からさきはまへのけい、小人ぎやうのはたらきみ事〜とある小人形について、手許の絵巻どもが示す所のみを報告しよう。

小人形について既にどれ程の研究のあるものか、如何かも、十分に調査してないが、小人形とは、操人形が次第に大きく精巧になつて、やがて享保十九年応神天皇八白幡(浄瑠璃譜)から後三人懸りが発達しても用ひた一人廻しの小さい人形である。遠見の景を示す場合に、今も若干用ひられる。操人形芝居の最盛時には、これも演出の方法として、かなりに好評を得てゐるやうである。そして

小人形を用ひたか否かなどは全く絵巻以上に示すものは外にないであらう。それらを絵巻に指摘しながら、変遷をたどつて見ようとするのである。

花山院都巽(享保元年)第四で帝が遁世の道行の条の遠景に「高ちやうちんもち、くはさんじへみかどをたつねにゆく」としてある所、浄瑠璃の文言に照合すれば、「門押開き高提灯役人互に手組して、足早算利用のさやの御跡慕ひ走り行」にあたる所、小さい人物を画いてあるのが、小人形と見える。こゝは「此所秋野のていふうけい大きによし」とある舞台装置に趣をこらした場で、かゝる所には、舞台を二重にして小人形をしかも高提灯など見せて、配したものであらう。享保六年の呉越軍談比翼台第三の末の「せいこの八けいの段」も様々に行動する小さい人を描いたのは、小人形を用ひたのかも知れない。享保十年の身替弓張月で、どうもう法師をつれて花山法皇順礼の条で、美濃の谷汲への順礼の道者を小さく出したのは、前の花山院と同じく小人形と見てよからう。以上の僅かな例からであるが、先づ最初は道行の場面などの遠景に、文章の意にそつて小人形を点出したやうである。以上の三つが豊竹座の興行なので、竹豊面座対立で、初めごろこの座は舞台装置に努力したらしい。このことも亦絵巻の物語る所であるが、豊竹座の創案でなくとも、しばしば用ひた所であつたかも知れない。

享保十五年竹本座の須磨都源平躑躅第四段で、義経がつゝじが谷に本陣を置いての戦の場、「つゝじのさかり見ごと〜」の装置を見たが、その遠景に「すまのうらいくさのてい大あたり」を見せたい。後藤兵衛が黒い馬のつてにける人形が小さく出でゐるのは、

武者人形が海中へ遠のくさまを見せたのが、新しかったのであらう。享保十八年の車置合戦様の道行、岸姫宮の条では、「此所みち行、すみよしおどり大あたりく」が小さい人間を描いてゐて、竹本座でも既に道行の遠景に小人形を用ひてゐたことを示す。それにしても住吉曲とは思ひつきと称すべきである。享保十九年の曾我昔見台は豊竹座のものであるが曾、我あだ打の条で「ふじ山のけい見ごとくく」に出して、「十ばんぎりの所大かざり大あたりく」として、小さく描いたのも小人形。とすれば、豊竹座も合戦場に小人形を使用して、この使用を一段に複雑にしたもの。両座のしのぎをけずる興行争が、かかる点にもあらわれたのである。かく興行上の關係の具体的資料を、絵屋が提供することも注目すべきである。

同年八月豊竹座の那須与市西海祝も、最後の八島のくだり、「此所ぶたい中打ぬき八嶋のけい大道具立、古今の大でけく」とある。舞台を打ぬいて遠景を作り、扇の的や、八そう飛び、弓流しのさまなど見せた。演劇といふより、余興に見せる見世物の気味が濃いが、小さく人物を描くのは、これも小人形使用と見てよい。竹本座もまけてゐない。深い遠景をしくんだに對して、三段に舞台を作り、近景、中ほど、遠景の三つを見せた趣向を案じた。作は元文元文二月の赤松円心緑陣幕、「ほんまのやかたかへり道く、惣うみのてい、どうもく」と云ふ海辺の遠景を作り、「此所山ぶしふね三だんにかわる古今の道具だて大出来大あたりく」で、三段にわけた。「きくひめくまわか都へ行」とした帆を上げた船が最も遠く、「本間山ぶし入道舟をいのりもどし兄弟をたすける」山伏が二段にあり、陸地が最近景となつてゐるたさまが、人間の大小でかきわ

けられてゐるが、これ又大小の人形を使用したことを示したものである。しかも段の違ふ所を近づけたり遠ざけたりして見せた如くでもある。これ以後、前出の太平かぶとの飾の頃まで一々に述べるも煩雜なので目ぼしい一二を上げることで終らう。

延享四年の義経千本桜第二、渡海屋銀平と平の知盛が、義経主従を船に乗せて討取らんと戦ふを、安徳帝を擁して典侍の局が見る所、その海上の戦は小人形である。「おりう(典侍の局が銀平の妻にかりになつての名)姿をあらためうみおもてをおしゆる」とあつて、海上「とももりた、かふよしつね切あい給ふ」さまが小さく絵屋に出でゐる。宝暦十一年の由良渡千軒長者(竹本座)のいはゆる山の段の条、「此所本山のかざり古今の大道具見事く」とある。これは、おさんが遠目鏡で山々を見るのが、「つしわう丸わすれぐさ」と名をかへしばをかり給ふ一所、これは子供の人形なので、始めから小さいかも知れぬが、遠景の小人形と見てよからう。何時かの文楽座でも、この山の段で、遠景を見せた演出を見た記憶がある。

ハ 人形についての様々の事情をうかがうことが出来ること。

これも大きく演出の一つとすべきかも知れないが、操芝居では最も大事な一事なので別章とした。これも簡単なが絵屋以上に説明し得る資料は多くはあるまいと思はれるものである。心づいたことを難然と並記してゆく。

当時の名人上手の出づかひのさまを示すことは、絵屋に関心を持つ人々は従来から注意されることで、今は上げない。その上手達のその上演における特別な演技を示すものもある。延享四年の傾城枕軍談で、名人吉田文三郎が出づかひで、人形のまゝ門を越したことは

淨瑠璃譜のその条にも「此時吉田文三郎鳥野莚左エ門の人形出遣ひにて門を越す操りを思ひ付はなはだ宜し」と見えるが、絵尽によると、その馬にのつた人形を巧みにつかつたさまが歴然とする。説明に云ふ

嶋の勘左エ門花がたひめが我にかわりしゝたる心ていをかんじ、一味ととうの判を切わたし、きりんあしげに打のり門をこし立のく、吉田文三郎人形つかいともにもんをこす

と見える。その文三郎は、恋女房染分手綱（宝暦元年）では、「能太夫吉田文三郎つかい申候」で、人形に能を舞せてゐる。

舞と云へば、人形に総踊をさせたのが、華和讚新羅源氏（寛延二年、豊竹座）であつて、「大切なには五節句操大おどり」として、附録としての上演であるが、そのさま絵尽に最も詳しい。曲目のみ上げておかう。

（おやまきやう）色里春駒おどり、七夕寺子おどり、（おやまきやう）雛祭曲水おどり、もゝの花がた汐干おどり、かたて人ぎやうひやうしおどり（人形の片手に人形をもち片手に花傘を持つた踊）、新町太夫名よせおどり、町風ひらおどり

（立役人ぎやう）作編笠さしおどり

（立役人ぎやう）菖蒲刀やつこおどり、黒羽しぐみおどり、凱陣やり踊、今様かしくおどり、菊重舞々おどり（「一つぽよりいづみわきいづる」）、いやみづくし盗おどり、ふしごと太夫不残

と云ふ大変なものであつた。大踊は花街や歌舞伎の影響であらうけれども、豊竹座は延享四年七月の悪源太平治合戦の四段目にも「若衆人ぎやうおやま人形立役人形座中のこらす相勤申候」「大お

どり」で「あやつり大でき」の大あたりをとつてゐる。摂陽奇観二十四の上（宝永二年の条）によればこの平治合戦が「あやつりにて踊を仕初」めたものだといふが、これを大々的にしたのが新羅源氏だったのである。

私は年代順に、以上の絵尽を繕いて行きながら、釜淵双紋巴（手許のものは再演の時のやうに思はれるが、初演元文二年）に至つて、面白い姿に出合つた。石川五右エ門に切られた非人が、から竹割で二つになつてゐる図である。頭が二つにわかれる人形は今もある。これは左右に胴まで二つになつてゐる。首が飛んだり、片腕が落ちる図はその前後にもあるが、この風の図は、見出されない。少くとも絵尽の画師が、この曲で珍しく認めて書いたものではないかと思はれる。さまざまと巧みな人形のからくりが考案され、発達したさ中、この頃にかゝるグロテスクな人形も考案されたことを示すものであらう。

絵尽の効用については、まだ／＼記すべきことが多い。が、本来は、かかる総括的なことよりも一曲々々の上演時の記録と云ふ、最も貴重な資料として、今後の研究に役立つべきものであらう。私には演劇資料として以外にも興味あるものは、演劇の常として、当世の流行世態をとり入れたものが多いが、それをそのまま／＼示した風俗史資料となる部分についてであるが、問題はこゝとは自ら別なので、割愛する。